

史話十一題

私観福山の歴史

田口義之

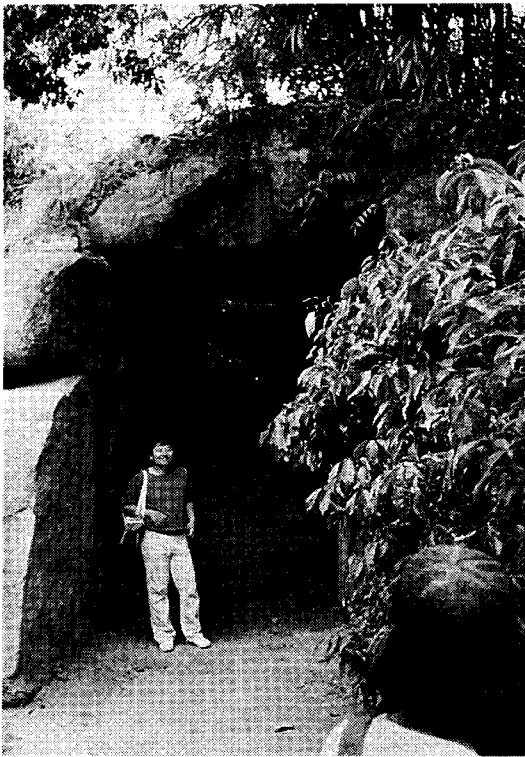
その壱 謎の二塚古墳

数年前、奈良県藤の木古墳が発掘され、豪華な出土品と残された人骨をめぐって論争がくりひろげられた。「古代の大豪族物部一族のものでは」「いや蘇我氏のものに違いない」など、古代史ブームが巻き起こった感がある。福山人には縁遠いと思われるだろうが古代のロマンは中央だけの特権ではない、探せばわが郷土にも古代のロマンは数多くある。

その一つは「二塚古墳の謎」である。二塚古墳といってもほとんど知る人はいない。福山の北部、駅家町法成寺に残る古墳時代後期（六世紀～七世紀）の古墳である。今では住宅の敷地となり、巨大な石室の一部のみが家の裏手に残っている。盛土はすでになく、石材が露出し、石室の前部も住宅の建設によって跡形もない。

だが、石室の前に立つとその大きさに圧倒される。長さ四メートル、幅二・五メートル、高さ三メートルの石室は県下最大クラスで中央のものと同様遜色はない。

謎というの外でもない、この石室の大きさ自体が謎なのだ。



駅家町の二塚古墳

福山地方の四～五世紀の古墳は小規模なものが多い。ところが六世紀後半になると様相は一変する。駅家町の服部大池の周辺に突然巨大な古

墳が出現する。中でも二塚古墳は他を圧倒する巨大さだ。何故だろうか。考えられそうなのは、地名「服部」である。服部は「ハタオリベ」がなまったもので、古代朝鮮半島からの渡来人が住んだ地名といわれる。そういえば、この古墳からはかつて大陸製の金色に輝く「馬具」が出土したそうだ。

二塚古墳の主は、大陸からの渡来人なのだろうか。もしかしたら彼は生前、聖徳太子や藤の木古墳の主と会話を交したことがあるかも知れない。

この稿を書くに当たって、今一度この古墳を尋ねてみた。石室に入ると朱く塗られた壁面は朝露に濡れて、ぶきみに光っていた。古墳の主は我々に何を問いかけているのであろうか。

その式 謎の白塚

初めに駅家町の二塚古墳の謎に迫ったが、実は、二塚古墳の謎はその後に起った異変に較べると小さな出来ごとでしかない。

古代福山の異変とは何か、それは横口式石槨の出現である。

福山市の中心部から北へ車で三〇分、国道一八二号線東城別れの西側山腹に江木神社という正体不明の神社がある。三〇メートル位の石段を登って行くと二百坪程の平地があって、奥に小さな社殿が二つぽつんと建っている。左の平地の端に芝の生えた土まんじゅうが見える。向うへ廻ると南に向いた石室が口を開けている。残念ながら入口は鉄柵で囲まれて中に入ることはできない。中をのぞくと普通の石室の奥に上下、

左右きれいに磨かれた花コウ岩でつくられた石棺が見える。これが横口式石槨で有名な猪子古墳である。

横口式石槨とは、石棺に直接墓道である羨道を取り付けたもので地方では極めてまれなもの。時代は七世紀後半、蘇我氏の専制下にあった大和朝廷は中大兄皇子や中臣鎌足による「大化の改新」によって天皇を中心とした中央集権国家への道を歩んでいた。

権力は天皇を中心とした皇族や有力豪族に集中され、古墳の築造も彼等一部の者のみの特権と化していった。そして、この時期、天皇や皇族、中央の有力豪族の墓制として採用されたのが猪子古墳に見るような横口式石槨であったのだ。壁画で有名な高松塚古墳も同種のものである。

福山地方の横口式石槨は猪子古墳だけでは



県史跡 猪子古墳

ない。猪子古墳から芦田川をはさんで西南へ三キロ。福山から芦田川の土手を車で二〇分程飛ばすと芦田町に入るが、この町の西北、久田谷の山中にあるのが曾根田白塚古墳である。道端に標柱があり、一本道の山道をまっすぐ登って行けば間違うことはない。この古墳は山頂南向きに築造されており、猪子古墳と違って中に入ることができる。奥に切石で築かれた石棺があるのは同じだが、直接石に手をふれることができるのが魅力である。石面は見事に加工され、これが千三百年前のものかと、しばし時を忘れさせてくれる。

曾根田白塚の場合、もう一つ注目すべきことは「白塚」という名称である。何でもないうだが、この名には深い意味がある。猪子古墳でもそうだが、古墳の石室を詳細に観察すると、石のくぼみや継ぎ目に白い固りが残っている。驚くべきことにこれは「しっくい」である。何の目的でしっくいを使用したのか、謎は白塚の名称が解いてくれる。多分この古墳の内部はかつて一面にしっくいぬらわれていたのだろう。古墳が千数百年のぬむりをさまされた時、最初に石室に入った人は驚いたはずである。外光に照らされた石室は白く輝いてはいないか。これが白塚の名の由来である。石室が開けられてすでに百余年、今では見る影もないが、こう想像するとかつての白塚がいかに美しいものであったか、また、このような古墳に葬られた人物がいかに高貴な人物であったのか、古代のロマンが広がるのである。

中央にしか見られない高貴な古墳が福山地方に数基存在するのは永遠の謎である。中央から派遣された高官のものか、或は政争で破れ備後で

死んだ年若き皇子のものか、考えるだけでも楽しいではないか。

その参 謎の古代山城

古代は限りないロマンと謎に満ちている。新聞紙上には毎日のように、発掘、発見の記事が載り、我々を楽しませてくれる。考古学の発達により今まで「古事記」「日本書記」によってしか語られなかった古代日本史が土の中から出てくる「物」によって再構築されようとしているのだ。古代の中心地だった奈良県一帯では「長屋王」の邸宅跡や藤の木古墳が発掘され、歴史好きの人達を興奮させているが、我々福山人もただ傍観しているだけでは面白くない。探せば我郷土にも考古学上の「発見」が埋まっているかも知れないのだ。

福山地方で、考古学上「未発見」とされている大物には「茨城」がある。茨城とは、日本書記に続く古代史書である「続日本紀」に載っている古代山城の一つで、今まで「ここだ」という遺跡は発見されていない。古代山城とは、七世紀後半、大陸との緊張した関係の中で大和朝廷によって築かれたとされる山城で、主に朝鮮半島からの亡命軍人によって築かれたため「朝鮮式山城」とも呼ばれる。九州や岡山県で確認された遺構で見ると、山頂や多くの谷筋を土塁、石塁で鉢巻き状に取り囲んだ大規模なもので、我々が持っている「城」のイメージからは随分かけ離れた存在である。

古代山城は、九州大宰府の「水城」を最前線として、近畿地方まで十数ヶ所知られているが、備後にも「続日本紀」の記載によって「常城」

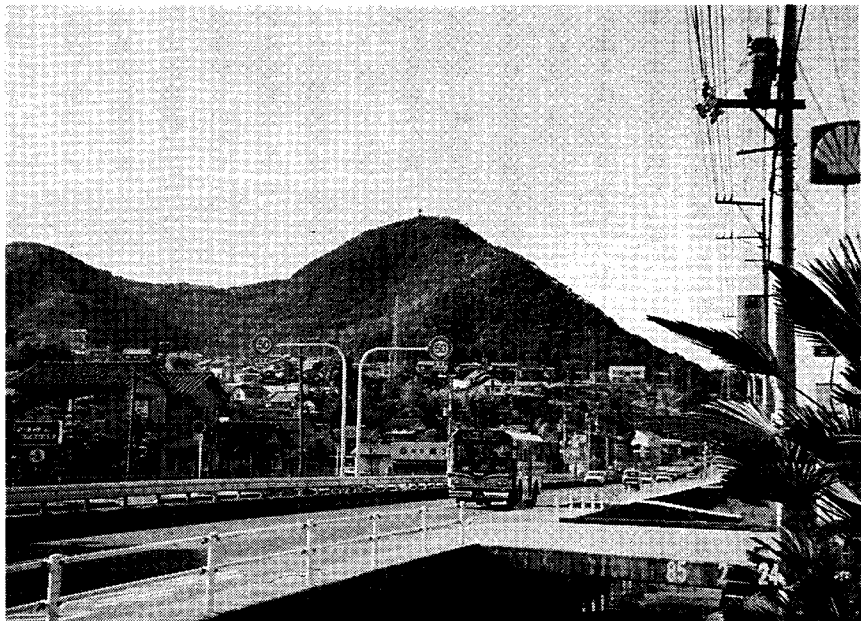
と「茨城」の二城が存在したことがわかっている。常城の方は今迄の調査によって府中市街の北方にそびえる亀ヶ岳山上にあったことが確実とされているが、茨城の方は前述の通り、諸説があつて確認されていない。最初、有力だったのは福山市街の東北にそびえる蔵王山である。常城とも見通しがきき、山上に古代瓦の出土する遺跡があるためだが、その後は積極的に主張する人は少ない。山城としての確たる遺構が残っていないからである。

最近になって注目され始めたのは、加茂町北山の芋原である。この地は、古代の「安那郡拔原郷」の推定地とされ、郷名の「拔原」は即ち古代山城の「茨城」に通ずるといふわけだ。さらに、芋原の地勢と「大スキ」遺構は芋原⇨茨城説を主張する十分な根拠になりそうである。

芋原は、吉備高原南端の標高約四百メートルの台地で、旧山陽道を見下すことができ、台地の周囲は北方を除いて断崖をなし、山城を築くには適した地形である。又、「大スキ」とは、芋原集落をぐるりとかこんだ大規模な「空堀」で、伝説では古代の大人おおひとが大きなスキで作ったとされているが、現地に行ってみるとどう見ても山城の防備施設である。

その大規模さから戦国時代のものとは考えにくく、古代山城「茨城」の遺構とした方が良い。

地元の古老によると、かつてこの「大スキ」上には、地元には産しない「白石」が連なっていたという。この石は、現在ほとんど残っていないが、空堀といい、この列石といい、古代山城の臭いがプンプンとただよっているようである。



茨城説もある蔵王山

その四 まぼろしの深津市

福山市蔵王町はかつて市村と呼ばれた、蔵王山の麓に開けた田園地帯であった。この地は、今では広々とした国道一八二号線が縦断し、昨年春には山陽自動車道福山東インターも開通して現代モータリゼーションの中枢として機能しつつあるが、はるか昔、今から千二百年前にも古代交通の要衝であったことは余り知られていない。

この地は古代文化の栄えた神辺平野から瀬戸内海への出口あたり、奈良、平安時代には極めて重要な位置を占めていた。

備後各地から集められた物産は府中の国府に集められ、一部は旧山陽道を通じて都へ送られたが、大量の物資の輸送には、当時も今も水運を利用するのが一番安上りである。こうして、国府から海への出口には多くの港町が生まれ、栄えたのである。

福山市内でもかつての港の名残りが地名として残っている。吉津、奈良津、深津がそれである。中でも深津は隣りの市村を含めて古代には相当繁栄したようで、平安時代の書物には「深津市」として出てくる。

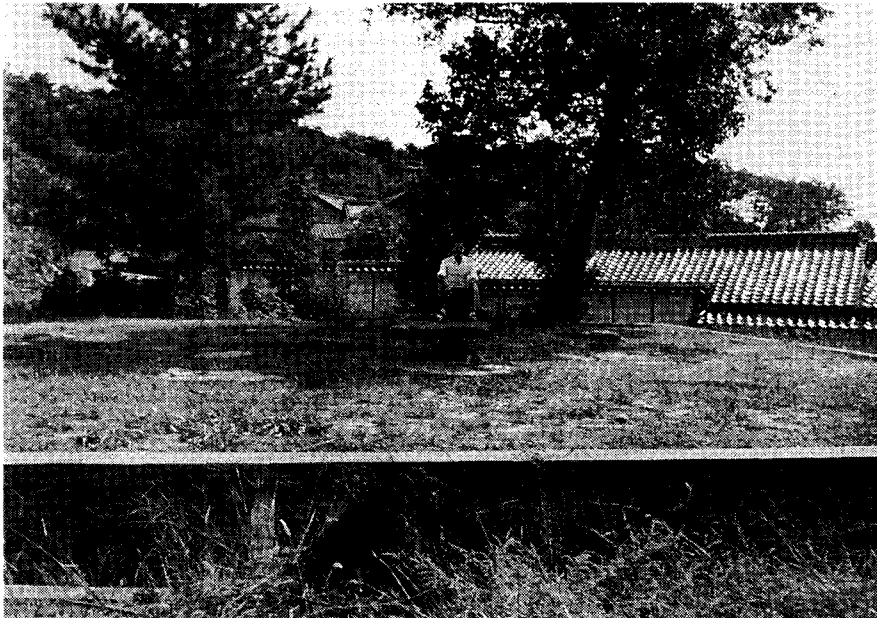
深津は港、市村はその背後で栄えた市場町を意味する地名である。

現代福山人から見ると、何でこんな所に港があったんだ、と不思議に思えるだろうが左にみならず、今蔵王山の南に広がる平地は、ほとんどが江戸時代の干拓によって開かれたもの。これを取り去ると「なるほど」と思えてくる。目をとじて想像してみよう。蔵王山の南麓は人家が密集し、その南端は白波が光っている。西側は深津高地が静かな内海に突出

して西風をさえぎる。南方は引野の高地が半島状に東風を断ち、出口には箕島が浮かび荒波を防いでくれる。

風力と人力に頼っていた古代の船にとってこんなに素晴らしいやすらぎの地はなかったであろう。

深津市、それは現代福山の原形ではなからうか。当時これ程栄えた



国史跡「宮の前廃寺」塔跡（福山市蔵王町）

ころは福山周辺にはなかったのだから。しかし、時の流れと、自然の営みは深津市を過去のものとしていった。静かな内海は次第に遠浅の入船不可能な入江と化し、船は芦田川河口の草戸に着岸するようになった、これが有名な草戸千軒である。深津市の人々も「商い」を求めて草戸千軒の住民となった者もいるであろう。そして、草戸千軒もやがて衰退し、商家は神島市（福山市神島町）へ移り、水野勝成が福山城を築くと、それらは更に城下に移され、現代福山の母体となったのである。

この深津市の繁栄を今に伝えるのが国史跡「宮の前廃寺」である。

近代的な福山市民病院の南の丘に市村の八幡社が木立の間に見えかくれしているが、この神社の境内に奈良時代の古瓦を出土する地があり、「海蔵寺」の跡と伝えられていた。戦後何回か発掘され、この地に五重塔と金堂を持った、立派な古代寺院が存在したことが判明したのはそんなに昔のことではない。今では建物の基盤が復元され、史跡公園として市民に親しまれているが、この古代寺院なども深津市の繁栄がなければ建立されなかったであろう。いわば、深津市の栄華のあかしと云ってよい。

深津に入港する船は海蔵寺の赤い五重塔を目標にしてやって来た。或は港には恋人を待ちわびる万葉の歌人もいたかも知れない。

路のしり、深津島山しましくも、君が目見ずば苦しかりけり

（万葉集卷十一）

その五 古代の津之郷

今度は、蔵王町から眼を西に転じて、芦田川右岸の古代を訪ねてみよう。

芦田川右岸の古代遺跡で、まず注目されるのは細形銅剣が出土した、郷分町の大迫遺跡である。この遺跡は標高三百メートルの高原集落、八反田から東に伸びた山脈が芦田川で断ち切られた突端に位置し、現在は碎石場になっている。

細形銅剣というのは、今から二千年前、中国大陸から渡来したもので、稲作を始めたばかりの弥生日本人にとっては驚天動地の宝物であった。

芦田川右岸、津之郷一帯の古代史を解くカギはこの銅剣にある。

先に、大迫遺跡は、芦田川に臨む高地にあると述べたが、当時、海水は神辺平野にまで流入しており、いわゆる「穴の海」を形成していた。前回述べた通り、陸上交通の未発達であった古代、水運は非常に重要な交通手段であった。

瀬戸内海を航行した古代船は、福山湾（現市街地）からさらに北上して穴の海まで入ったであろう。つまり、銅剣を出土した大迫遺跡は古代の重要航路を見下す位置にあったのである。

古代の航海は、天候と潮流に左右された。古代人にとって天象は神の存在を示すものである。航海の安全は神に祈願しなければならぬ。

その神こそ大迫遺跡の銅剣ではなかったか。細形銅剣は、他に箕島からも出土しているが、箕島、郷分とつなぐ線が古代の重要航路であったこと

とは疑いなく、そして、このことが、芦田川右岸、つまり古代津之郷の繁栄につながったのである。

縄文時代前期に最大の大きさを誇った神辺平野の「穴の海」は、その後の海面の降下によって徐々に面積を縮少し、弥生時代の後半には名残を止めるのみとなり、芦田川は直接福山湾に河口を開くこととなった。大河の河口が重要な港湾となることは今も昔もかわりない。否、古代ではもっとも重要であった。河口は河川交通と海上交通の接点となったからである。そして、この芦田川河口に繁栄したのが古代の港町「津之郷」であったのだ。

「津之郷」とは、奈良時代になって地名は二字の佳字で表記するようになったという、国の命令でつけられたもの（当時は「津字」郷）で、郷は当時の行政呼称である。とすると、元々は単なる「津」の郷と呼ばれていたことが想像され、古代福山人にとって、港（津）と言えば、津之郷が思い浮べられた程、繁栄した港町であったのだ。

古代津之郷の繁栄を示す古代遺跡は数多い。津之郷の背後、赤坂町加屋の山上には大規模な弥生遺跡が存在し、卑弥呼時代の古代城塞ではないか、といわれている。また、津之郷小学校の校庭からは、古代の交易を示す「貨泉」が出土している。貨泉は中国古代の銭貨で紀元一世紀頃鑄造されたもの。貨泉の出土は、かつてここが古代の交易の中心地であったことを示している。古墳も津之郷から赤坂にかけて、それこそ数知れない。巨大なものも多く、有名なイコーカ山古墳は二重の埴輪列を持っているし、坂部（津之郷町）の古墳群には全長十メートル余の巨大石



津之郷町の坂部4号古墳

室を持つものもある。

古代津之郷の繁栄は奈良時代後期に頂点に達したようである。東の海蔵寺と並んで、この地にも古代寺院が建立された。現在は田畑に変じているが、坂部古墳群の南方、真言宗田辺寺の門前からは、かつて五重の塔の相輪（てっぺんの金具）が出土し、寺の境内には塔の中心礎石も残

っている。出土した瓦をみると、その建立は蔵王町海蔵寺よりは、遅れるようだが、それにしても、人々が堅穴住居や堀立小屋に住んでいた時代、青い瓦の五重の塔の出現は容易ならざる事件であった。

津之郷の古代時院は「和光寺」と呼称されたようだが、この寺の盛衰は、津之郷の盛衰と軌を一にしていた。津之郷の港は芦田川の運ぶ土砂によって次第に埋り、港の機能は、平安時代末に出現した「草戸千軒」に譲るようになった。和光寺も衰退し、戦国時代を迎える頃には、うらぶれた草庵同然となつてしまつた。

この和光寺が、田辺寺として再興されたのは戦国後期の永祿年間のこと、津之郷串山城主田辺光吉の手によつてであつた。かつて「津」(港)の財力によつて栄えた寺院が、武士の手によつて再興される。時の流れとは言え、無常を感じさせる出来事である。

その六 備後守護土肥実平

時代の変革は常に戦乱を伴う。古い体制は戦乱の中に滅び、勝ち抜いた者が新しい時代をつくる。

保元、平治の乱で自己の力に目覚めた武士達はそれまでの平安王朝体制を打ち破り、源頼朝を首長として鎌倉幕府を東国に樹立する。この過程が、「源平の争乱」である。

源平の戦いは、真の武家政権の確立をめぐる、源氏と平家の争いであつたと共に、東国と西国という日本国家の二つの潮流のどちらが天下を取るかという地域間の戦いでもあつた。

源氏が主な基盤を関東武士団に置いていたのに対し、平家は瀬戸内地方の西国武士団を存立の基礎としていた。そして、平家の滅亡は東国の勝利を意味し、以来百余年、西国は東国の植民地の観を呈したのであつた。

余談になるが、日本歴史を見ると、政権交替の底流には、常に東国と西国の争いがあつた。古代国家は西国を政権の基盤とし、東国はさながらその植民地であつた。それに対し、鎌倉幕府は関東御家人の政権で、純然たる東国国家であつた。次の室町幕府、將軍足利氏は東国出身とはいえ、幕府は京都に開かれ、西国政権といつてよい。織田、豊臣政権も同様である。近世の江戸幕府は関東を本拠とした東国政権である。江戸幕府の成立が関ヶ原合戦の勝利の上であつたのは、政権が西国から東国に移る象徴的な出来事であつた。そして、江戸幕府を倒したのは、又もや西国の薩長兩藩であつた。

さて、話を元にもどそう。鎌倉幕府の成立は私達の住む備後地方にどのような影響を与えたのか。まず言えることは、在地の諸豪族が平家と共に滅び去り、東国武士が源氏の進駐軍として入り、そのまま居付いてしまつたことである。

歴史は勝者に優しく、敗者に厳しい。今、滅び去つた者達のことを記そうと思つても、史料は何も語つてくれない。平家の軍勢を追つて備後地方にも源氏の軍勢が侵入し、激しい戦いが行なわれた筈であるが、それを語ってくれるものは何もない。ただ、当時の記録によると、源氏の軍勢は、元暦元年七月、備後から安芸に侵入したが、六度戦つて六度敗

れ、同年九月、頼朝の弟、範頼の出馬によって、やっと安芸に進駐している。名は伝わっていないが、在地の武士達の反撃はよほど強烈であったものと思える。それは平家に殉ずるといふよりも、侵略者に対する地元の抵抗ではなかつたらうか。

源氏の占領軍として備後地方に君臨したのが有名な土肥実平である。土肥氏は相模の国、今の神奈川県出身の東国武士で、本貫地は小田原市内に属す土肥郷である。実平は源頼朝の拳兵に逸早く馳参じ、石橋山の合戦で敗北した頼朝に「大将の切腹にはそれなりの作法があるもの」と、自刃に逸る頼朝をいさめたことで有名である。源平合戦では陸路、平氏を追った前線指揮官として活躍し、平家滅亡の後、そのまま止まって備後守護となった人物である。

「守護」とは、鎌倉幕府が国々に一人づつおいた軍事指揮官で、平時は国内の治安維持にあたり、戦時には国内の軍勢を率いて將軍の下に馳参じた。いわば鎌倉幕府の分身といつてよい。

坂東武士らしく、備後での実平はかなり手荒なことをやったようである。現在の世羅郡には大田荘という大きな荘園があったが、地頭でもなんでもないのに、在地の者と手を組んで年貢を横取りしたり、甲奴郡の有福荘でも、非法狼籍の限りをつくすと頼朝のもとに訴えが出ている。

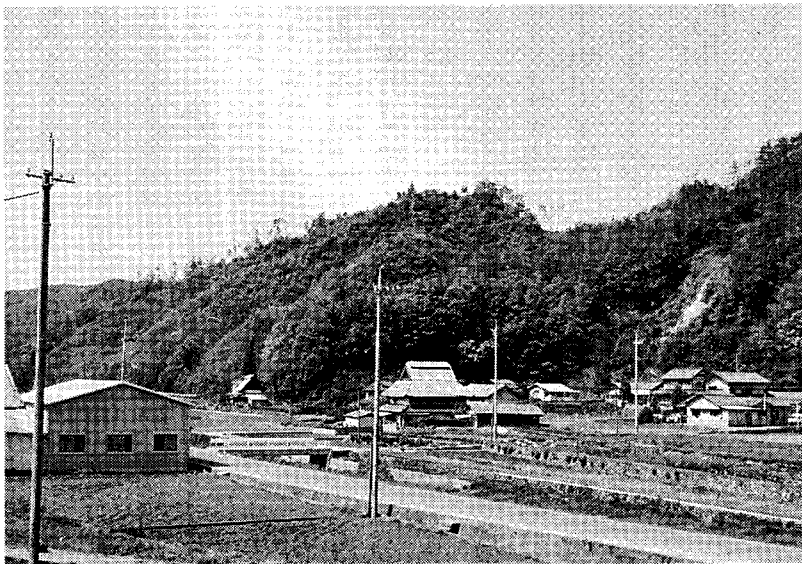
ところで、この実平の居城と伝える山城が福山市内にも残っている。市街の北郊、駅家町服部の谷奥にそびえる泉山城跡がそれである。山頂は平にならされ、山麓には「土居」と呼ばれる屋敷跡が残っている。

八百年の歲月は長い。関東武士、土肥実平の武威に苦しんだであろう

土地の人々のうめき声も、今はもう聞こえて来ない。居城の跡も夏草が繁るにまかせられ、散しく「かわらけ」の破片が往時を語るのみである。実平の備後土着は結局成功せず、子息の遠平は安芸沼田荘の地頭となり、子孫は小早川氏として安芸の豪族として発展していった。

その後も東国武士の備後入部は続くが、南部の福山地方では、それ程顕著な事例は知られない。在地の抵抗が強かつたのであろうか。

福山人の活躍を史上に見るには、あと百三十余年、南北朝の動乱を待たなければならぬ。



土肥実平の拠った泉山城跡

その七 長和庄と長井一族

福山市瀬戸町は、今大きく変ぼうしつつある。東側には「明王台団地」が造成され、市街地に近く、のどかな丘陵と田園地帯の続くこの町が、都市近郊の住宅地に一変するのも間もないことだろう。

かつて、この地は「長和庄」と呼ばれた「庄園」があったところである。京都の蓮花王院の領地で、現在の瀬戸町から佐波町、草戸町、水呑町一带はこの庄園に含まれていた。吉津町から千田町附近を占めた「吉津庄」と共に福山市域では代表的な庄園といえる。

長和庄の地頭として、鎌倉幕府から任命されたのが長井氏である。長井氏は鎌倉幕府の創設に尽力した有名な大江広元の嫡流にあたる名門で、広元の次男時広が武蔵国長井庄の地頭に補任され、「長井氏」を名乗った。ちなみに、後に中国地方の大々名となった安芸毛利氏も大江広元の子孫にあたり、戦国時代毛利元就が備後に勢力を伸ばした時、同族（本家にあたる）の長井氏の存在は大きな力になったといわれる。

長和庄地頭となった長井氏は、当時の慣例に従い、庄園を分割して子孫に伝えていった。記録によると、長和庄地頭職は東、西に二分され、西方は、後に毛利氏の家老となった福原長井氏が伝領し、東方は備北甲奴郡田総庄を本拠とした田総長井氏の所領となった。又、長井氏の系図によると大江広元の孫にあたる泰経は「長和」を名字とした、とあるから、実際に長和庄に來住した長井一族もいたことがわかる。

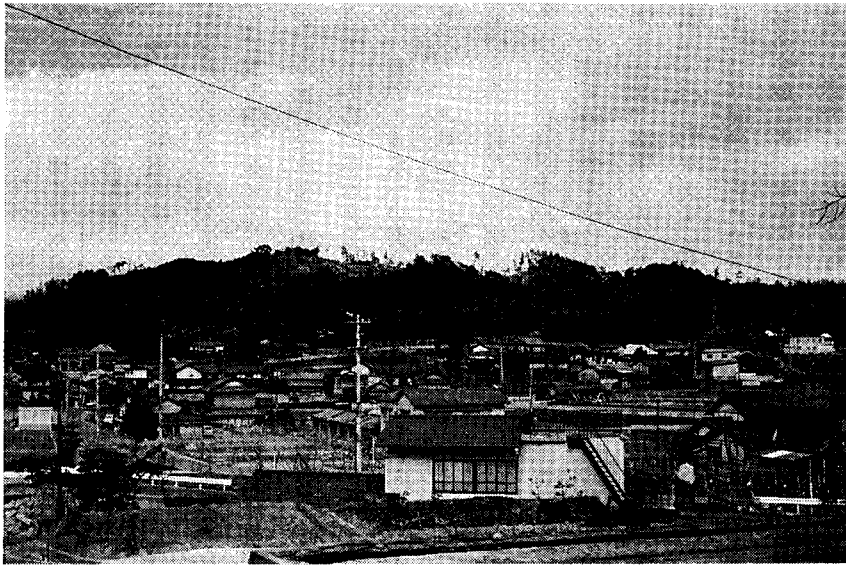
庄園の地頭に任命された武士達は、「泣く子と地頭には勝てぬ」とい

うように武力にものを言わせて、強引に庄園を自分のものにしようとした。当然、庄園領主たる京都の大社寺や貴族と争いが起こる。時の主権者、鎌倉幕府はこの問題に頭を悩ませた。そこで幕府が両者の和解の方法として考え出したのが「下地中分」である。つまり「領家と地頭で庄園を分割してしまえ、そのかわり、両者とも他人の土地には手を出すな」ということである。

長和庄の場合も、領家と地頭長井氏は、この方法で手を打ったようである。現に瀬戸町には「地頭分」という大字が残っている。この地名は、長和庄で下地中分が行なわれたことを何よりも雄弁に物語っている。

余談になるが、我々現代人は「地名」というものを余りにも安易に扱ってはいないだろうか。この地頭分の例のように地名は、その土地、土地の歴史を現代に伝えてくれる貴重な文化遺産なのである。昨今、次々と宅地造成が行なわれ、清水ヶ丘、向陽台等の新地名が次々に造成されている。確かに新しく住宅を持つニューファミリーには明くて、響きのよい地名であろう。しかし、何世代かあとの我々の子孫は、こうした何の重みもない地名の元で生活するのである。これでよいのだろうか。

長和庄に根を下した長井一族を待ち受けていたのは、南北朝時代から戦国時代迄続いた長い戦乱の世であった。長和庄西方地頭だった福原長井氏は早くより脱落し、田総長井氏も、周辺の強力な武士宮氏や杉原氏の侵略に悩まされ、室町中期には遂に撤退の止むなきに至った。又、土着した長井氏も的場山城を本拠とし戦国初期まで踏み止まったが、遂に新たに興った杉原一族のため没落してしまった。武士の長井氏にしても



長和庄の拠点的山城址

所領を確保していくのは容易でなく、領家が力を失うのは必然であった。長和庄も戦国時代、空中分解し、その名は瀬戸町内の大字として残っているのみである。しかし、彼等の残した文化遺産は現代でも生きている。福山市民の誇りである、草戸町の明王院五重の塔は、長井一族の外護の元に建立されたといわれ、川底のポンペイといわれた「草戸千軒町」遺

跡も、地頭長井氏の保護のもとに栄えたといわれる。共に現代の厳しい競争社会では何の実益も生まない過去の遺物だが、多忙な生活の中で赤い五重の塔を仰ぐひととき、或は芦田川の河原に立って過去の草戸千軒の繁栄を偲ぶ時、心の安らぎを感じるのは私だけであろうか。高度に発達した現代社会、だからこそ、こうした文化遺産を大切に守っていかなければならないのである。

その八 熊野町一乗山城跡

「夏草や、つわものどもが、夢のあと」

中世の山城跡を歩く時、常に去来する一句である。中世は山城の時代と言ってよい。村々に割居した武士達は、小さな山城を拠点に、自己の力を試そうとした。中世の治乱興亡を実感するには、こうした山城を訪ねるのが一番である。

福山市にも、一般の人が気軽に行ける山城跡が何ヶ所か残っている。中世の武将渡辺氏の拠った、熊野町の一乗山城跡（市史跡）もその一つである。

熊野町の中心六本堂で左折、広々とした田園の中を登りつめると、熊野水源地の巨大な土手が眼前に迫ってくる。この土手に立って水面を眺めると逆三角形の山が水面に映っている。これが一乗山城跡である。

登り口は山の西側にある。土手上の道を数百メートル進めば左手に大きな看板が見える。細い山道は地元の人々の手によって整備され登り易い。汗をかきながら登ると数分で石段の広い道に出くわす。中腹に城の

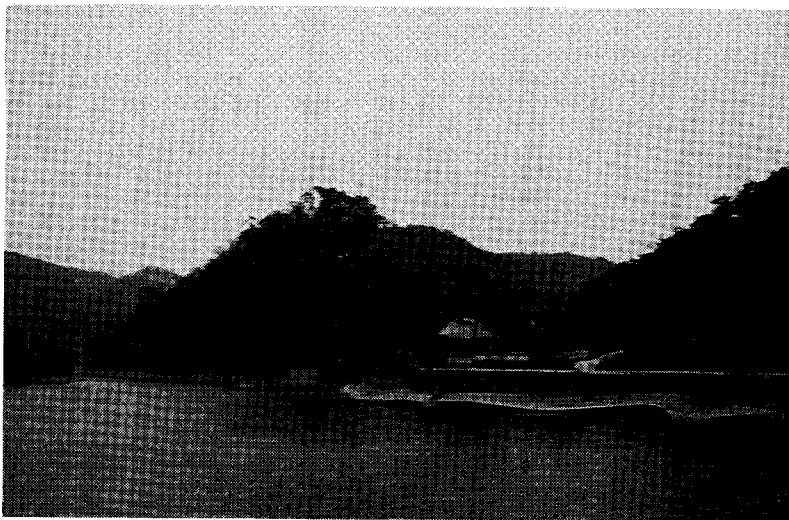
守護神として祀られた神社があつて、その参道として作られた道である。今は余り利用されないらしく、城の登山道のぶつかるところから下は草ボウボウである。この参道を少し登ると急に視界がひらけ、眼前にガラス窓のはまった社殿が見える。これがかつて城の鎮守であつた「七面大明神」である。聞き慣れない名だが、城主渡辺氏が熱心な日蓮宗徒であつたため、その守護神を祀つたのである。

社殿のあたりから、目を凝らすと、山城の遺構が、そここに見え始める。社殿の背後に本丸への登り口があるが、この部分はよく見ると土塁状に盛り上り、道の左右は人工的に削り取つてある。山城用語でいうと、これは空堀の一種で、空堀と呼ばれるもの、この城の場合、丁度、本丸への入口を守るように築かれていて、ここに城門があつたと想像される。ここから数分、胸を突くような急坂を登ると、本丸である。

途中、左右に平坦地が見られるが、この説明は後に譲る。

山頂本丸は、径二〇メートル程の楕円型の平坦地で「本丸」と刻んだ石柱が立ち、広場は地元の人々が年一度、下草刈をされるそうで、歩き易い。広場の南側（奥）に石垣で囲まれた台地がある。近世の天守台にあたる部分で、白亜の天守閣はなかつたにしても、物見櫓状の建物が立つていた所である。この台地に立つと、城の占地や形状がよくわかる。台地の背後の山続きは、深い空堀によつて断ち切れ、廢城から、四百年たった今日でも、一度落ち込むと、上つて来れそうにない。城は尾根続きを、この空堀によつて断ち、本丸のある部分を独立させ一個の城郭としてゐるのである。

本丸を守るために築かれたのが、登る途中の左右に見えた平坦地である。本丸の端にそつて一巡してみよう。五メートル位下に、幅七メートル程の細長い平地が、本丸をはち巻状に取りまいてゐる。これは帯郭と呼ばれる本丸を守る陣地の跡である。矢竹を踏み分けながら、郭の跡を歩くと、本丸側の斜面に、石垣が崩れ残り、在りし日を偲ばせてくれる。



熊野町一乗山城跡

山城で一番重視されたのは「水源」である。いかに峻険な山城でも水がなければ数日ともたない。この城の水源は、本丸の東側にあった。

七面大明神の社殿の左側に水源への道がある。百メートル程進むと、岩盤をくり抜いた井戸が残っている。数年前、地元の人々が水を抜いて調べたところ、底に小さな石が置いてあり、水神を祀ったものと推定された。さもありなんである。山城にとってそれ程水は重要であったのだ。

もう一度、本丸に登ってみよう。眼下に城主が支配した熊野盆地が広がっている。やゝ盆地の奥にかたよりすぎている感もあるが、記録によると城下東側の道は、かつて山陽道から鞍へ越す街道であったようだ。城はこの街道をも意識して築かれているのだ。

松頼に身を任せながら、しばし瞑目してみよう。疾風どとうの乱世、この城も幾度かの攻防戦をくり返したであろう。迫り来る軍勢の雄叫びが聞こえて来そうである。

その九 中世の松永

松永の庄園 中世は庄園の時代である。庄園とは中央権門の私的な領地で、平安時代末から全国各地に設けられ、中世を通じて地域の基本的な呼称となる。

松永附近にあったとされる庄園には、新庄、福田庄、藁江庄などがある。もっとも早く史料に現われるのは藁江庄（金江町附近）で、平安末の史料に見え、京都の石清水八幡宮領となっている。他の庄園については、庄園領主名は明らかでないが、いずれも平安末から鎌倉初期にかけて、

在地領主が、その私領を中央権門に寄進して、庄園化したものであらう。

大庭氏の入部 鎌倉幕府は、守護、地頭を各地に配して全国を支配したが、松永地方では建保元年（一二一三）、大庭三郎景連が新庄の地頭として入部している。大庭氏は、坂東平氏の名門で、相模国大庭御厨を本貫地とした有力な関東武士である。同氏は、この地に入部するにあたって新庄の中心、本郷（福山市本郷町）に大場山城を築き居城とした。その後一二代平右エ門景秀の代、天文九年（一五四〇）までこの地に居城したという（芸備風土記）。

杉原氏の高須入部 福田庄は、福山市芦田町から、尾道市高須町にかけての広大な面積を占める庄園であったが、この内尾道市高須町附近は、「福田庄の内、高須」と呼ばれたように、独立的な傾向を持ち、鎌倉時代には御家人の山鹿氏が地頭職を有していた。

南北朝内乱に際して、足利方として活躍した杉原信平は、観応二年（一三五二）二月、尊氏より勲功の賞として、「福田庄高須」の地頭職を与えられた。信平の子孫の一流は、高須に本拠を構え、「高須杉原氏」として松永西部にも勢力を振うようになる。

古志氏の入部 戦国時代、この地方で最も有力だったのは古志氏である。古志氏は佐々木氏の一族で、出雲（島根県）を本拠とする武士であるが、同氏が松永地方に勢力を持つようになった発端は明らかでない。一説には、応永八年（一四〇一）、備後守護代として入部したというが、ともかく戦国初期には、新庄大場山城の大庭氏を追い、この地にすっか

りと根を下した国人武士として近在に威を振った。

渋川氏と藁江庄 藁江庄は室町時代にも石清水八幡宮領として存続しているが、在地は請負代官に任せていたようで、その支配も次第に有名無実化し、長享元年（一四八七）頃には年貢は全く送られていない。

この庄園で特筆すべきことは、塩年貢の存在が挙げられる。文安三年（一四四六）正月の藁江庄家分塩浜帳に、「ナタ浜二一桶、道姓カイバラ」とあって、沿岸部庄園としての特色を示している。

戦国時代、この庄園を支配したのは渋川氏である。渋川氏は、足利氏の一門で代々九州探題を世襲した名門で、同氏の所領は近隣の沼隈郡山南にもあった。渋川氏が何故この地に勢力を持つようになったのかは不明だが、九州を没落した渋川義陸は、永正年間（一五〇四～一五二〇）備後国御調郡八幡庄（三原市八幡町）に本拠を置き、名門として備南地方に覇をとなえ、勢力の確立に狂奔している。しかし、渋川氏は、義陸の奔走にもかかわらず、在地に勢力圏を確立するのに失敗。早くも天文年間には藁江城（赤柴城か）を小早川隆景に預け、その保護下に入っている。

毛利氏の征覇 戦国期の松永地方は、山陰から南下する尼子氏と、防長の大内氏、安芸の毛利氏との抗争の場であった。特に、古志氏は尼子氏との関係が深く、この地方の尼子方の重鎮として、毛利氏の攻撃を受けている。

しかし、高須杉原氏などは早くより毛利氏に味方し、古志氏も天文年間には毛利方となっている。又、渋川氏も義陸の子義正はその妻に、毛

利元就の娘を迎え、毛利氏の一翼を荷なっている。こうして戦国時代の後期には松永地方は毛利氏の領国となり、やがて近世の開幕を迎えるのである。



大場山城址に残る石垣

その拾 山名理興ただあき

時は戦国時代、室町幕府の権威は全く地に墜ち、全国至るところ、弱肉強食の争いがくりひろげられていた。

福山地方も同様である。幾多の群雄が興り消えていった。今回は、この群雄の一人山名理興をご紹介し、戦国福山の面影を偲んでみたい。

山名理興は、山手町の銀山城主として興り、一時は神辺城主として、備後半国に号令した人物である。

理興の出自は、他の戦国武将の例にもれず、明らかでない。一説に、備後の名族杉原氏の出と云うが、異説もある。

理興が群小の山城主の中から頭角を現わしたのは、戦国もたけなわの天文年間（一五三二～五五）のこと、当時中国地方を二分していた、大内、尼子の争いをたくみに利用してのものだった。

理興は初め、大内方に組していた。そして天文七年（一五三八）、大内氏の命によって、尼子方の山名忠勝の拠る神辺城を攻略、忠勝にかわって神辺城主となったのである。

神辺城主となった理興は、大内勢力をバックにして、一躍備後群雄中のトップにおどり出た。大内氏は、理興を信頼し、備後南部の支配権を彼にゆだねたのだ。

この時期、理興と同じ立場にあったのが、隣国安芸の吉田に興った毛利元就である。元就もこの頃、大内氏の下にあって安芸に勢力をたくわえつつあった。

両者の明暗を分けたのは、出雲尼子氏に対する姿勢であった。

毛利元就は、徹底して尼子と対決し、天文九年、尼子三万の大軍を吉田郡山城下に迎えた時にも断呼として籠城し、終に撃退することに成功した。この勝利は、元就の戦国武将としての声望を決定的なものにした。

これに対して理興は、大内から尼子方へくら替えすることによって勢力を拡大しようとした。

天文一〇年（一五四一）、尼子の敗北を見た大内は、この機会に一気に尼子を踏みつぶそうと、出雲遠征の軍を興した。

しかし、尼子の本拠、富田月山城は、難攻不落の名城、尼子の勢いもこの頃はまだあなどりがたいものがあった。

戦いは長期戦となった。

そこで起ったのが山名理興を始めとする有力武将の尼子方への寝返りであった。大内勢の一角をなしていた武将達の一部が月山城を攻撃すると見せかけて、城中に走り込んだのだ。

本国（山口県）からはるばる遠征してきた大内軍にとって、この裏切りは致命的であった。たちまち大内勢は崩れたら、本国目指して逃げ出した。尼子方となった理興は、神辺城へ帰ると、ただちに出陣し、昨日までの友、大内方に対して攻撃を開始した。自己の野望を遂げる絶好の機会と勇み立ったのだ。

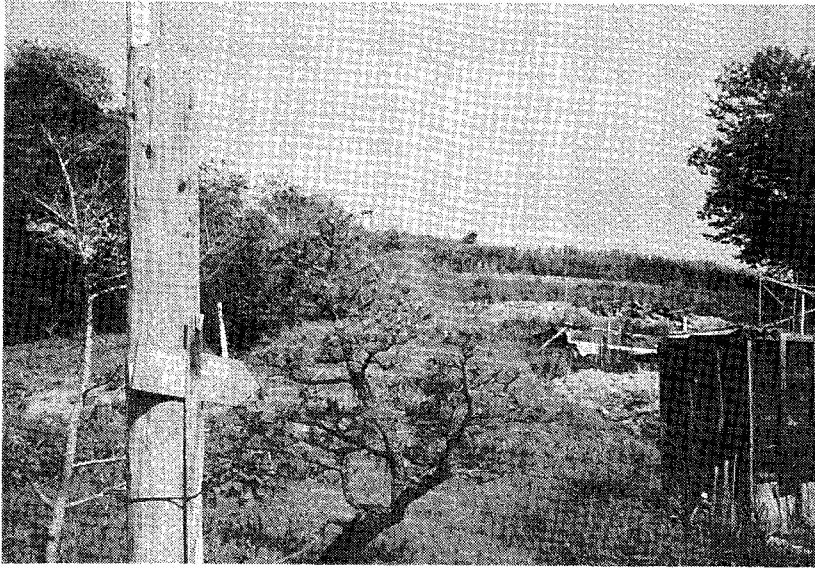
理興の兵は、備南を席卷し、隣の安芸国椋梨（賀茂郡大和町）にまで進入した。

しかし、理興の運もここまでであった。理興が充分勢力を拡大する

ともなく、大内方の反撃が始まったのだ。安芸には毛利元就がいた。この希代の名將は、あくまで大内方に踏み止まり、理興を粉碎することで備後にも勢力を伸ばそうとしたのだ。

ここに足掛七年に及んだ神辺合戦が始まった。

大内、毛利の反撃は素早かった。安芸に進出した理興兵を撃退すると、



“坪生要害” 清水山古戦場（福山市坪生町孤原）

きびすを接って神辺城に押し寄せたのだ。

理興方もよく戦った。福山地方のあちこちで理興対大内、毛利の激戦が行なわれた。坪生町の清水山合戦は、この時、大門から進撃した大内勢を理興方が出城を構えて迎え討ったもの。

しかし、この戦いも大内方の勝利に帰し、籠城七年目の天文一八年（一五四九）九月、理興は出雲に逃走、神辺城は大内氏の手に帰した。

ここで理興が勝っていたら、或は毛利元就はなく、戦国大名山名理興が誕生し、歴史に大きな足跡を残していたかも知れない。

理興は、その後毛利氏に詫言を入れ、許されて神辺城主に復帰したのもつかのま、弘治三年（一五五七）春、死去。死因は中風であったという。

理興の死去を以って、福山地方の群雄争覇は終り、戦国大名毛利氏のもとで、近世の開幕を迎えることとなる。

その拾遺 福山の誕生

現在の福山があるのは、福山人なら誰でも知っている、水野勝成の福山築城によることはいまでもない。

しかし、勝成はなぜ、福山城を築いたのだろうかということになると、そうは簡単に問屋がおろさない。

一般的には、勝成は、はじめに与えられた神辺城を、北面する不吉な山城として好まず、新たに水陸交通の要衝として、現在福山城のある、常興寺山の地を新城の適地として認め、備後十萬石の鎮所としてふさわ

しい新城と城下町を築き、これが現在の福山の基礎となったと言われる。確かに、一々もつともで、大筋では間違いなからう。しかし、勝成の福山築城に至るまでには、それなりの背景があるはずで、その背景をしっかりとらえないと、真に福山築城の意味を理解したことにはならない。

勝成以前、福山地方を領していたのは、福島正則と毛利氏である。

福島正則は、関ヶ原合戦後、広島城主となり、安芸、備後の大名となったが、芸備に内部すると、最初に行なつたのは、領内の要所に出城を築き、防備を固めることであつた。

福山地方に置かれた福島氏の出城は、神辺城と、鞆城で、共に南北朝時代以来の伝統をもつ古い城である。もちろん、福島氏は両城とも改築し、近世的な城郭としているが、水野氏以前の福山地方の中心が、神辺と鞆に分れていたことは、勝成の福山築城の理由を探る大きなヒントになる。

神辺城は、山陽道を見下す山城で、陸上から東（江戸）を目指す場合、関所の役割を果たしていた。鞆城は、古くから瀬戸内海の高港であつた鞆を押え、海上交通の要である。

勝成は、西国の外様大名を押えるために備後に配された徳川の譜代大名であり、その重要な使命は、幕府の軍事的な押えとなることであつた。

勝成は、はじめまよつたであろう。神辺では海を押えられないし、鞆では陸を押えられない。そこで考えられたのが、常興寺山への築城である。ここなら山陽道も近く、海にも面している。

神辺と鞆、この両者の長所を取って福山築城となつた。いわば、福山以前、備南の中心は二つに分れていたのを、勝成は一つに統一したと言えようか。

備南の中心が神辺と鞆に二分していたことは、勝成以前の支配者にとつてもめんどろなことであつたらう。福島氏の場合、本拠が広島だったため、余りこの問題に頭を悩ました形跡はないが、毛利氏の場合は、福山湾岸に新城を築き、この問題を解決しようとした形跡がある。

天正年間、毛利氏は神辺城に元就の七男毛利元康を配したが、古書によると、元康は慶長初年、現在の深津高地の南端、王子山に新城を築き、本拠を神辺から深津に移そうとしたと伝える。王子山城の跡は明確でないが、このことなども、勝成の福山築城の意味を考える場合、見逃がしてはならないことである。

ともあれ、福山は、神辺と鞆という中世以来の政治の中心を統合する地として出発した。いわば、福山は備後の中心として新たに作られた町といえようか。

現在、果して福山は備後の中心地としての役割を十分はたしているといえるだろうか。我々未来の福山を背負う者の責任は重いのである。

（おわり）